

ICT活用現場を視察

山藤組施工の砂防堰堤で群馬県



真。同社社員約10人も現場研修として参加した。同工事は、関東地方整備局利根川水系砂防事務所が発注した。浅間山火山活動に伴い発生が予想される融雪型火山泥流を

軽減するための直轄火山砂防事業で、地蔵川第二砂防堰堤と片蓋川第一砂防堰堤を施工する。工期は3月12日から10月29日まで。

ICT活用施工（施工者希望I型）、週休2日適用工事（受注者希望方式）、建設キャリアアップシステム（CCUS）活用推奨モデル工事（発注者指定試行）で、遠隔臨場も採用している。全国建設業協会の21年度「CCUSモデル工事現場」に選定された。

地上型レーザースキャナーで起工測量した上で、若手社員が3次元データを作成し、ICT建設機械で施工（掘削・床掘、盛土・埋め戻し、砂防ソイルセ



メント）する。段階確認、確認・立ち会い、材料確認、社内確認に遠隔臨場を採用している。発注者の立ち会い、社内の立ち会いは100%遠隔臨場となっている。

山藤組の佐々木勇二所長は、「日々の工事進捗や現場の出来形が机上で把握でき、工務の負担をかなり軽減した。従来施工に比べ90日間、追加工事を含めても50日間の短縮が可能だ」という。

6月までの現場閉所率は、4休8休の28・5%を上回る35・63%となっている。

CCUS試行に対する意見として、元請けからは書類が重複する、各協力会社や個々の作業員のID取得を推進するのに苦労する、カードリーダーの設置は容易だがパソコンやWi-Fi環境が必要などの意見が出ている。下請けからは会社・個人のID取得に時間と費用がかかる、資料が多いといった声が寄せられている。

山藤社長は現場視察の参加者に謝意を述べた後、「皆さんの業務に少しでも役に立てほしい」とあいさつした。桐生土木事務所の総見良二所長は、「現場の最新状況を目で見て、触れることができ、有意義な時間となつた。きょうの知識を今後の業務に生かしたい」と話した。